

校長室だより 2021 年度3月号

Be creative !



250名の卒業生 旅立つ

穏やかな天候のもと、2月26日、第62回卒業式が挙行されました。本来であれば、在校生の「おめでとう」の言葉や卒業を祝う歌声が校舎に響き渡るのですが、第60回からこの62回の卒業式ではそれが叶わない形となっています。しかしながら、その限られた条件の中で、「自分たちがやれることは何か。」「自分たちは後輩たちに何を伝えられるのか。」「自分を一番近いところで支えてくれた父や母にどうやって感謝の気持ちを伝えるのか。」人間としての知恵と力を今こそ発揮しよう！を合言葉に、卒業生は胸をはって卒業をしていきました。この3年間、コロナ禍のもと、一度も実現できなかった合唱をICTの力を活用して、彼らは実現をしました。卒業式では「旅立ちの日に」の歌声が会場を包みました。3年生の成長を示す取り組みだったと思います。

校長式辞—抜粋

君はこれから何度もつまづく。でもそのたびに立ち直る強さも持っているんだよ。

校長としての初年度、この2021年度の夏休みは本当に忙しい日々を過ごしました。それは、ひとえに夏休みの最初から最後まで、君たちが様々に活躍をし続けたからです。折しも、東京オリンピック終了後、日本中がコロナ感染拡大の第五波に覆われ、不穏な状況にある中で、君たちが目標に向かって果敢に挑み、その目標を達成していく姿は、私たちに大きな勇気と生きる意欲を与えてくれるものでした。どんな状況の中にあっても、君たちは腐らず、軸足がぶれることなく、自分たちのできることに挑んでいきました。



皆さんは、まさに本校の新しい歴史を創った。これまで見たことのない景色を私たちは見させてもらいました。経験したことのない体験を学校全体でさせてもらいました。私たち教員は、自らを奮い立たせる思いで、君たちの背中を必死になって追いかけてきました。

君たちはこの3年間で何をつかんだのか。I部リーグ2位という成績を収め、プリンスリーグに挑戦したサッカー部のキャプテン黒野君、副キャプテン山盛君、橋場君は次のように語りました。「自分たちが頑張ったのは、他の部活動に所属する仲間たちが多くの成果を生み出してくれたからだ。頑張っているみんなを見ると、自分たちも負けられない、頑張らねばという思いが湧いてきた。」

「他者から学ぶ」という謙虚な姿勢を君たちは育んできた。そして、学んだことを自分たちの生きる力としてきた。その君たちの姿にまた、誰かが励まされ、力をもらってきたはずだ。本学園の創設者、鈴木修学先生が大事にされた「人間の尊厳を守り、尊重する」ということも、こういうことなのだと私は思います。

「人生は苦戦の連続。この苦戦を切り抜けていく内的エネルギーを持続させることが大事なんだ」と述べたのは、「知の巨人」と呼ばれた立花隆です。「人生は苦戦の連続」、その人生への船出です。この4月、民法の改正により、君たちは成人、新しい時代を生きる「大人」となる。君たちはこの大きな時代の流れの中で高校を卒業していきます。どんな人生が君たちを待ち受けているのか。どんとこい！という思いです。君たちなら大丈夫、私は心から信頼をしています。

「ひとつだけ教えておくよ。きみはこれから、何度もつまづく。

でも、そのたびに立ち直る強さも持っているんだよ。」

40年後ののび太が、小学生ののび太に贈った言葉です。

君たちの人生がいくつかの苦戦の後に大きく花開き、実を結ぶことを、私たちは心から楽しみにしています。

卒業、おめでとう。背筋を伸ばして、進んでいきなさい。



答辞（抜粋）

支える人になる 卒業生代表 高橋凜々花



今、日本福祉大学付属高校で過ごした日々を振り返ると、本当にあつという間だったと感じています。3年前、不安と期待を胸にしながらゆりのき坂を登り、高校生活が始まりました。1年生の10月、唐突に「吹奏楽部の部長をやってみないか。」と顧問の先生から声をかけられました。人の前に立って引っ張っていける性格ではないけれども、いい経験になるからやってみようと決意し、引き受けることにしました。しかし、部長として先輩に指示を出すことにためらう、同じ学年であっても部長として接しなければならぬところに戸惑いを感じる日々。なにより初めての取り組みも多く、うまくいかないことがたくさんありました。

それでも、一緒にやっという声かけ続けてくれた仲間を支えられ、少しずつ部長としての仕事にも慣れてきた2年生の4月、コロナウイルスの影響で休校となり、学校生活はもとより、部活動もできなくなりました。入部してきてくれた1年生とも顔を合わせることができないまま、6月の学校再開、さあ、これからという時に、先輩と舞台に立てる最後の夏のコンクールも中止、その後、久しぶりの演奏だ、大会だと思つた時に、その気持ちは裏切られてきました。3年生が引退し、1、2年生だけで臨む冬のアンサンブルコンテストも録画審査が続き、多くの方に私たちの演奏を生で聴かせることはできませんでした。2年生の間は、やりたくてもできない不自由さを強く感じる日々でした。

3年生になり、2年生の時の「やりたかったけれど、やれなかった」という思いを乗り越えようと、気持ちを新たに部活動に励むようになりました。1年生の時には25人しかいなかった小バンドが、いつの間にか50名を超える大バンドに成長しました。大バンドになったからこそ、演奏の質が求められます。より高みを目指して、まわりからも、そして自分たち自身の要求水準も上がってきます。うまく伝えられない自分自身に悔しさを感じるものが多くなってきました。



私は、部長として時には厳しく皆を引っ張らなければならない一方で、低音パートを奏でる演奏者として皆の演奏を支える存在でもありました。矛盾するこの2つの役割を担うことは気持ちを切り替えることが難しく、自分を責めすぎる原因にもなりました。それでも、一人で全部やらなくてもいいと言ってくれた仲間や、できないところをきちんと教えてくださる顧問の先生方、やってみたらいいと背中を押してくれた両親が常に私の近くにいてくれました。おかげで、とても心が救われ、常に近くに誰かがいてくれる大切さを知りました。

このような経験をしたからこそ、今度は私が誰かを支えられるような存在になりたいと思うようになりました。そのために、大学に進学してからは、特に子どもや家庭の問題について学び、将来は、その抱える困難や課題を解決するための支援者として働きたいと志望しています。この高校での経験は、自分が支援者となった時に大きな糧となることでしょう。

最後になりましたが、ご臨席賜りました皆様のご健勝と日本福祉大学付属高等学校の更なる発展を心から願って、答辞とさせていただきます。

🐞 今月の言葉 🐞 卒業に 杉山平一 『夜学生』より

もう私は書かねばならなかった / けふまで私は少年であった
しづかに あのいっばいの夢を / 銅貨のやうににぎりしめて
いつまでも いつまでも / ゆっくり ナイフを研ぎ / 心こめて 鉛筆を削ってゐたかったものを
新しい雑記帳よ よごれないでおくれ / とがった芯よ 折れないでおくれ

